2022年度慶應義塾大学における
性暴力の実態調査結果報告書

慶應義塾大学未公認学生団体　Safe Campus

2023年1月13日

要約

慶應義塾大学未公認学生団体 Safe Campus は、2020 年度に続き 2 回目となる、2022 年度慶應義塾大学における性暴力の実態調査をオンライン上で実施し、慶應義塾大学に在学する学生や教職員、事務職員、卒業生から 313 件の有効回答を得た。なお、オンライン上での任意回答であるため得られたデータには偏りがある。そのため本調査の結果は慶應義塾大学における性暴力被害の実態を正確には表していない。

調査結果を分析した結果、明らかになった主な事実は以下の通りである。

- 回答者の 24%が、2020 年 10 月以降かつ大学在学時に、何らかの性暴力被害の経験がある。その内訳は「言葉による性暴力」が 18.8%、「性的接触」7.7%、「同意のない性行為」は 1.6%であった。これらの数値は前回の調査結果と大きな変化はない。
- 今回新たに調査した「オンラインでの性暴力」の被害経験は 8.9%であり、主に SNS やオンライン会議ツールなど個人間でのやり取りの中で被害が発生している。
- いずれの被害においても、最も多い加害者属性は同級生であり、飲み会やサークル活動中の被害が多い。
- 学部生女子の回答者は、1 年生であっても 4 人に 1 人が何らかの性暴力被害を経験している。その割合は学年が上がるごとに増加し、学部 4 年生女子の場合、およそ 2 人に 1 人にまで増加している。とりわけ「言葉による性暴力」の被害経験が多い。
- 前回の調査と比較して、「ポルノを見せる」「性的な声掛け」「同意のないボディタッチ」が性暴力に該当すると回答した割合は増加しており、性暴力として認識される行為が拡大している。
- 回答者の 85.9%が大学における性暴力やその他の性的不正行為について問題視しており、前回調査に比べて 29 ポイントほど増加している。
- 大学入学後、性暴力やその他性的不正行為に関する研修モジュールを受講した経験のある回答者は 28.1%に留まる。
- 研修モジュールの受講経験がある回答者は「言葉による性暴力」「オンラインでの性暴力」について、受講経験のない人に比べて 10 ポイント以上被害経験割合が高い。また、性暴力への認識や学内の相談機関に関する認知度も若干高い。このことから、研修モジュールは性暴力の認知が全くない層に対し、最低限の知識を付与することに効果があるといえる。
- 回答者の概ね 6 割から 7 割が、学内で性暴力事案が発生した際の大学の対応に信頼感を抱いている。
- 性暴力被害を相談できるいずれかの学内の相談機関について、63%の回答者がその存在を認知しているものの、被害経験のある回答者のうち 74.2%は相談機関を利用していない。その理由として、「学校のリソースが私に必要な助けを与えてくれるとは思わなかった」「どこに行けばいいのか、誰に言えばいいのかわからなかった」といった回答が一定数寄せられた。
- 回答者の 53.67%が「大学における性暴力に問題意識をもち、大学への信頼感を感じ、性暴力の定義についておおまかに認識しているものの、相談機関等大学の取り組みを知らない」ことがわかった。

以上の結果を踏まえ、①ガイダンスやその他コンテンツによる新入生向けの啓発、②大学内の各機関と連携した在学生向けの啓発、③相談機関の利用促進、の 3 点を提言する。

目次

要約 2
目次 4
第一章　はじめに 6
　団体の沿革 6
　前回の調査について 6
　調査の意義 6
　調査概要 7
　　コラム　AAU レポート 8
　　AAU 情勢調査の概要 8
　　AAU 情勢調査における調査項目 8
　　AAU 情勢調査の結果 8
　　AAU 情勢調査と本調査の相違点 9
第二章　調査結果 10
　第一節　回答者の属性 10
　第二節　基本集計 11
　　第一項　被害の実態 11
　　第二項　被害者の状態 14
　　第三項　性暴力問題に対する問題意識と研修モジュール 15
第三章　分析 19
　第一節　被害実態の分析 19
　　第一項　女性の被害 19
　　第二項　学年による被害経験の違い 20
　第二節　研修モジュール 21
　第三節　学内の相談機関 25
　　第一項　大学に対する信頼度 25
　　第二項　相談機関の認知度 26
　　第三項　被害を相談した際の対応 27
　　小結 29
補記　性的マイノリティ・大学院生・教員の回答 30
　第一節　ジェンダークィアおよびクエスチョニングの集計結果 30
　　第一項　ジェンダークィアおよびクエスチョニングの被害状況 30
　　第二項　ジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者と性暴力に対する意識 30
　第二節　大学院生の集計結果 31
　　第一項　大学院生の被害状況 32
　　第二項　大学院生の回答者と性暴力に対する意識 32
　第三節　教員の集計結果 33
　　第一項　教員の被害状況 33
　　第二項　教職員の性暴力に対する意識 33
第四章　結語 34
　第一節　調査結果のまとめ 34

第一項　学内の最新の被害実態 34
被害件数 34
女性の被害 34
考察 34
第二項　学内の性暴力に対する認識の変化 35
性暴力の認識 35
研修モジュール 35
相談機関 35
考察 36
第二節　本調査の限界、今後の展望 36
第三節　提言 37
新入生ガイダンスの実施 37
在学生に向けた情報発信 37
相談機関の利用促進 38
付録 39
参考文献 45

第一章　はじめに

団体の沿革

慶應義塾大学未公認学生団体 Safe Campus（以下 Safe Campus）は慶應義塾大学内の性暴力、性差別をなくすために取り組む学生団体である。

Safe Campus は 2019 年 5 月、有志の学生が教員らと「キャンパスにおける性犯罪を防止するための慶應義塾大学有志の声明」を発表、署名活動を行ったことを皮切りに同年 11 月に団体として発足した[1]。団体発足以来、学内の諸機関に対する問題提起や、学生向けのワークショップ実施、性的同意ハンドブックの作成などキャンパスにおける性暴力防止のために活動している。とりわけ現在は、学内の学生自治組織である全塾協議会と連携し、サークル内における性暴力防止の啓発に力を入れている。具体的には、全塾協議会主催の傘下団体の代表者向けに性暴力防止ワークショップにおいて毎月講師を務めている。

前回の調査について

Safe Campus は 2020 年度に第一回学内性暴力実態調査を実施し、325 件の回答を収集した[2]。前回調査において明らかになったことは以下の三点である。

第一に、被害の現状について、1 年生に対する性被害の加害の多くが先輩によるものであったことや、性暴力の多くが学生間で起きていることを明らかにした。また、女性が被害に遭いやすい傾向が見られ、被害発生場所としては飲み会が最も多かった。また、飲酒と一部の性暴力の類型には相関関係があることが示された。

第二に、性暴力に対する認識について、レイプやセクハラを性暴力として認識していない回答があり、性暴力の正しい認識が周知されていない可能性が表出した。さらに、大学で性暴力に関するなんらかの説明会やモジュールを受講したことがないと回答した学生が 2 年生以上で約 7 割、1 年生で約 8 割であった。

第三に、前回の調査では学内に設置されている相談機関のうち、回答者の半数以上に認知されている相談機関がないことが明らかになった。また、大学の性暴力に対する実際の対応については「ほとんど知らない」「全く知らない」と回答した学生が、在学歴の長い 2 年生以上の学生であっても 8 割を超える結果となった。

調査の意義

本調査は前回の調査以後、学内外の様々な情勢が変化したことから、以下を明らかにすることを目的とした。

---

[1] 団体名は「Safe Campus Keio」として発足し、2021 年 4 月に現在の名称に変更。

[2] 前回の調査についてはこちらを参照。https://uploads.strikinglycdn.com/files/a796450e-deb1-4fd1-914e-376274da8c4d/%E6%85%B6%E6%87%89%E7%BE%A9%E5%A1%BE%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%80%A7%E6%9A%B4%E5%8A%9B%E3%81%AE%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%B5%90%E6%9E%9C%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf?id=3716214

第一に、学内の最新の性暴力被害実態を明らかにすることである。オンライン飲み会やSNS など閉鎖的な環境での交流が増えた 2020 年から、オンライン上の性暴力が発生している可能性が考えられるものの、未だその実態は可視化されていない。加えて、今年度は対面でのサークル活動が再開されたことから、コロナ禍以前との学内の性暴力の実態が変化している可能性がある。

第二に学内の性暴力の認識の変化を明らかにすることである。近年、大学当局は学生向けにkeio.jp上における誓約書の記入や、刑法上の性犯罪を解説する動画を全塾生向けに公開するなど、性暴力について一定の対策を進めている。また、社会的にも性暴力への関心は高まっていることから、前回の調査と比較し、学内における性暴力への関心や認識がどのように変化したのかを明らかにする。

調査概要

調査は、2022 年 9 月 15 日から 10 月 29 日までを実施期間とした。調査開始当初は調査終了日を 10 月 15 日と予定していたが 2 週間延長した。

本調査は Google フォーム を用いてオンライン上での任意回答とした。調査対象は、keio.jp を所持している慶應義塾大学の学生、職員、卒業生である。調査方法として、団体SNS（Facebook、Twitter、Instagram）、Safe Campusメンバー個人のSNS、教授への周知を中心とした。そのため、本調査の結果は、慶應義塾大学における性暴力の実態を完全に明らかにできるものではなく、回答結果にはバイアスが内在している。

本調査では 34 項目の質問を用意した。質問内容は性暴力被害経験についての質問、性暴力に対する認識や知識を問う質問、性暴力問題に対する問題意識を問う質問に大別される。実際の質問項目は本報告書の付録とした。

コラム　AAU レポート

本調査作成の際には、調査項目の作成や比較による仮説の検証などの点でアメリカ大学協会（AAU）が 2019 年に実施した調査を参考にした。

アメリカ大学協会（以下：AAU）は、2019 年に協会に加盟している 33 の大学を対象として性暴力と性的不正行為に関する情勢調査（以下：AAU 情勢調査）を行っている。

AAU 情勢調査の概要

AAU は米国の 63 大学、カナダの 2 大学によって構成されている[3]。性暴力と性的不正行為に関する 2019 年の情勢調査ではこのうち 33 の大学が対象となった。調査対象者数は 830,936 人であり、そのうち 181,752 人からの回答があった。同協会が 2015 年に行った同様の調査よりも回答者数は増加した。

AAU 情勢調査における調査項目

AAU 情勢調査において主な調査項目は以下の通りである。

- How extensive is nonconsensual sexual contact?
  同意のない性行為はどれくらい蔓延しているのか
- How extensive are sexual harassment, stalking, and intimate partner violence （IPV）?
  セクシャルハラスメント、ストーカー、近親者間暴力はどれくらい蔓延しているのか
- What are students' experiences with campus programs and resources？
  大学の研修やリソースに関する学生の経験に関して
- What are students' perceptions and experiences related to sexual assault and other sexual misconduct?
  学生は性暴力とその他の性的不正行為をどのように認識および経験しているのか
- Have the prevalence, knowledge, and perceptions of risk for sexual assault or misconduct changed since 2015?
  2015 年と比較して、性暴力の件数、性暴力に関する知識とリスクの認識はどう変化したか

AAU 情勢調査の結果

2020 年 1 月に発表された調査結果の一部を抜粋する。

回答者の 13.0%が同意のない性的な行為の被害経験があり、女性と TGQN（トランスジェンダー女性、トランスジェンダー男性、ノンバイナリー、ジェンダークィア、ジェンダークエスチョニングおよびジェンダー未回答者）、学部生の被害が男性、大学院生と教職員よりも多かった。被害経験の有無はジェンダーアイデンティティによる差が顕著であった。

回答者の 41.8%がセクシャルハラスメントの被害経験があり、そのうち 18.9%はセクシャルハラスメントが学業などに影響を及ぼしたと回答した。大学院生は指導教員や教職員からセクシャルハラスメントを受けやすい傾向にある。

回答者の所属している学校が性暴力の被害報告を真剣に受け止めるかという質問では、65.5%が「はい」と回答した。一方で被害経験のある回答者に限定すると、「はい」と答えたのは45.0%であった。

2015 年に実施された同様の調査に参加した大学の結果を比較すると、2019 年の調査では同意のない性的な行為の被害経験がある学生は男女ともに増加した。一方で性暴力の通告件数および性暴力の定義を問う質問の正答率は向上した。

AAU 情勢調査と本調査の相違点

本調査と AAU 情勢調査の共通点を述べる。まず、本調査の質問項目は AAU 情勢調査の調査項目を参考にしている。本調査の調査対象も AAU 情勢調査に基づき、学部生だけでなく大学院生や教員も含んでいる。また、現行の法によって性犯罪と規定されていない性暴力、例えば性的なジョークやデート DV などの被害経験も AAU 情勢調査と同じく調査対象となっている。

一方で本調査と AAU 情勢調査は主に調査対象者の数や調査回答者数、実施時期、調査対象となった国が異なるためこれらの結果を単純比較することはできない。AAU 情勢調査の調査対象者は米国およびカナダの AAU 加盟大学のうち 33 校であり、対象者数は約 83 万人にのぼる。慶應義塾大学の学生数は 2022 年 5 月時点で約 3 万人である[4]。

さらに AAU 情勢調査は新型コロナウイルスの蔓延により大学の授業がオンライン化する 2019 年に実施されている。本調査では大学の授業やサークル活動のオンライン化を踏まえ、オンラインでの被害経験の有無を質問するとともにオンライン化以前における性暴力の実態との比較を試みている。

さらに調査対象となった国が異なることも２つの調査の単純比較を不可能としている。米国やカナダと日本では文化的・宗教的背景や学生・教職員のバックグラウンド、価値観、教育や法制度などが大きく異なる。特に、AAU 情勢調査では性暴力の被害を通告できる機関として大学内警察が挙げられていたが、これは慶應義塾大学には存在しない機関である。

本調査の実施および分析、比較の際には以上のような相似点に留意した。

---

[3] 2022 年時点での AAU 加盟大学一覧：Association of American Universities. “Our Members”. https://www.aau.edu/who-we-are/our-members （2022 年 12 月 18 日最終閲覧）

[4] 慶應義塾大学. 慶應義塾大学学生数 （2022 年 5 月現在）. https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/data/2022-university.pdf. （2022 年 12 月 18 日最終閲覧）

第二章　調査結果

第一節　回答者の属性

本調査の回答数は 327 件であり、そのうち 313 件の回答を有効回答数とした。

図 2-1-1 は回答者を学部別の分布で示しており、その約半数は文学部と法学部に偏っている。回答者の属性を学年別に確認すると、学部生の回答者数に偏りはみられない。また、前回調査と比較すると大学院生と教員の回答割合 8.6%から増加した（図 2-1-3）。図 2-1-3 は、ジェンダーアイデンティティ（以下：GI）別で回答者数の分布を表している。回答者の 58.8%が女性であった。

以上の点を踏まえると本調査のデータには偏りが多分に含まれていると言わざるを得ない。慶應義塾の在籍者数によれば文学部と法学部の在籍者数は学部と研究科を合わせた在籍者数の 27.6%に留まり、学生の女性比率も 35.7%である[5]。

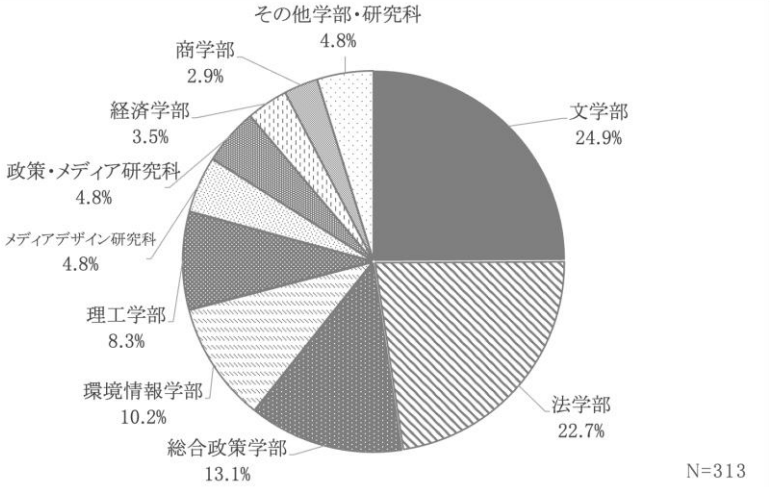

図 2-1-1　所属別回答者割合

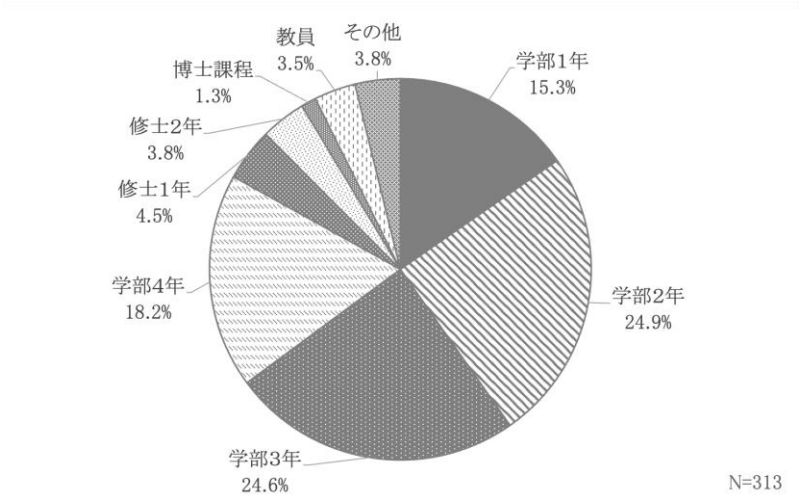

図 2-1-2　学年別回答者割合

[5] 慶應義塾大学,https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/data/2022-university.pdf, https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/data/2022-1-faculty.pdf

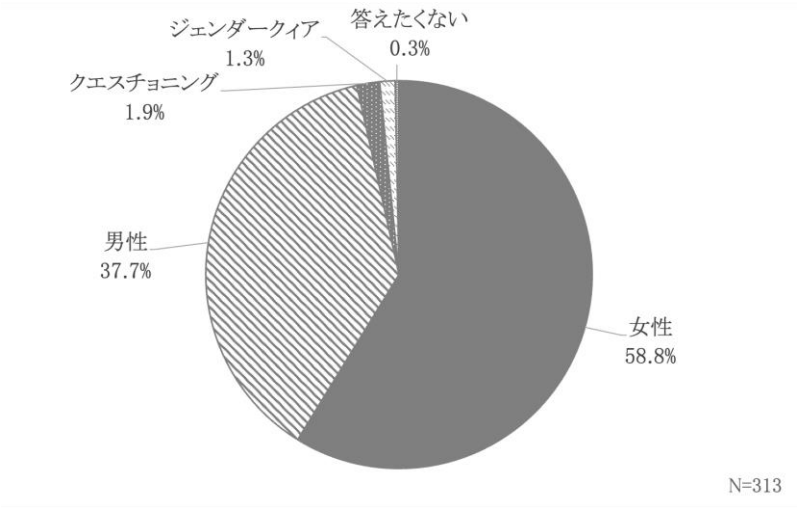

図 2-1-3　GI 別回答者割合

第二節　基本集計

本節では本調査で明らかになった結果を 3 つの視点から概説する。付録の質問項目に対応した単純な集計をもとに、その回答の詳細を紹介する。ただし、次の第三章ではいくつかの質問項目を組み合わせたり、回答者の属性による分析を実施している。そのため文脈上第三章で取り扱った方が適切な質問項目については、本章においては割愛もしくは概略の記述に留める。

第一項　被害の実態

本調査では性暴力を「言葉による性暴力[6]」「性的接触[7]」「同意のない性行為[8]」「オンラインでの性暴力[9]」の 4 つに類型化し、それぞれについて被害経験の有無と発生場所、加害者の属性について質問した。その結果、回答者の約 24.0%が、2020 年 10 月以降にいずれかの性暴力被害を受けたことが明らかになった（図 2-2-1）。

それぞれの類型について確認すると言葉による性暴力の被害経験がある人は全体の 18.8%だった（図 2-2-2）。性的接触の被害経験は 7.7%であり、同意のない性行為の被害は 1.6%であった（図 2-2-2）。どの数値も前回調査から大きな変動はなかった（表 2-2-3）。前回の調査では加害者の属性のうち先輩が最も多かったが、本調査では上記のいずれの被害も、同級生による加害がもっとも多かった（表 2-2-4）。

表 2-2-5 は、性暴力被害が発生した状況を示している。飲み会の場が最も多く、それに続いてサークル活動中での被害が多い。これらは前回調査と同じ傾向である。サークル活動中だけでなく、プライベートで会っている時に被害にあったという回答もみられた。

---

[6] 調査では「不快にさせられるような性的発言を受けたり、不快な性的なジョークや性に関する話」と質問した。

[7] 調査では「同意なく体を触られて嫌な思いをしたこと」と質問した。

[8] 調査では「同意のない性行為（キス、セックス、フェラチオ、膣への指挿入など）をされたこと」と質問した。

[9] 調査では「オンライン上（SNS、オンライン授業、オンラインでのサークル活動、通話など）で、性的に不快にさせられたこと」と質問した。

本調査では、新たにオンライン上での性暴力についての質問を追加した。コロナ禍のオンラインキャンパスライフにおいて、回答者全体の 8.9%が SNS やオンライン会議ツールを通して何らかの性暴力を受けたことがわかった（表 2-2-2）。被害の媒体は SNS やオンライン会議ツールが多く、開けた空間ではなく個人間のやりとりで被害が発生している（表 2-2-6）。加害者は同級生と先輩が多く、自由記述欄にて「慶應生を名乗る人」からのオンライン性暴力も見受けられた。

表 2-2-7 は、加害者が飲酒をしていたかの調査結果である。

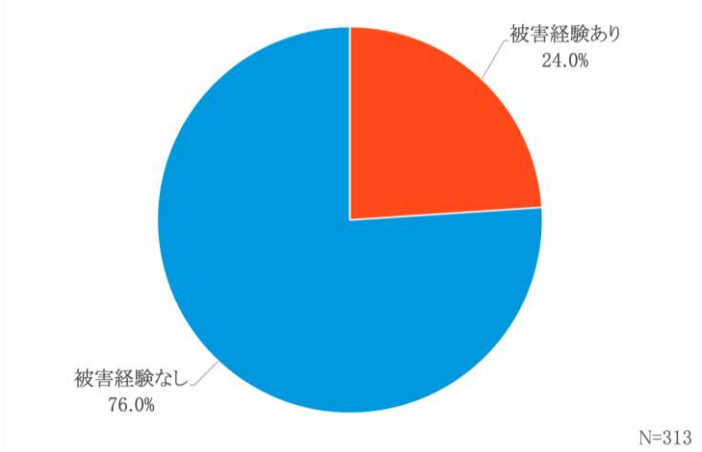

図 2-2-1　何らかの被害経験割合

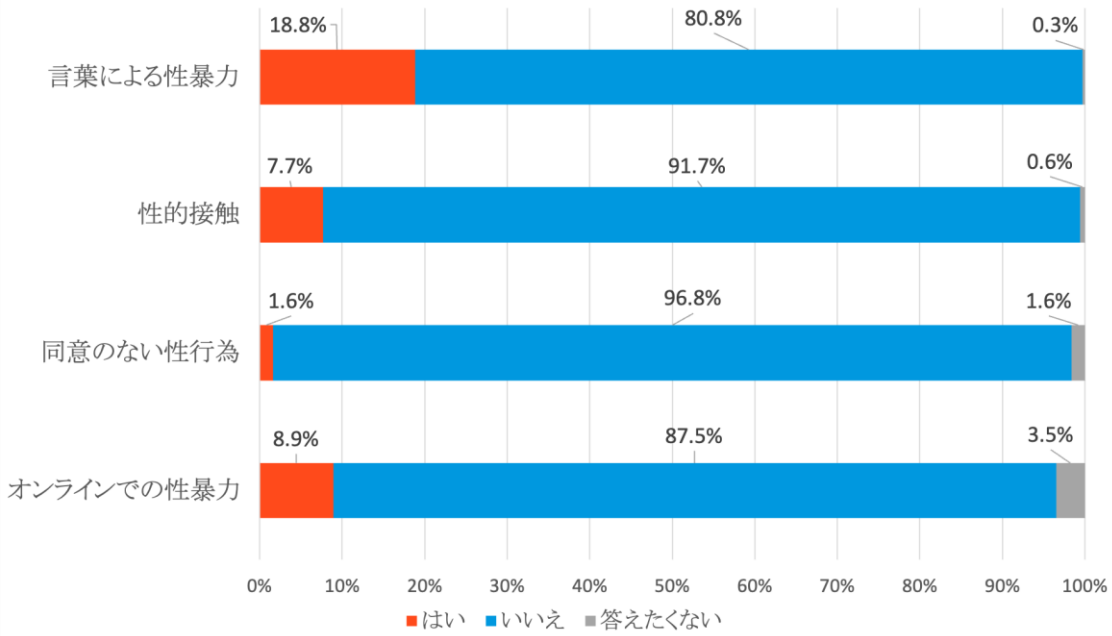

図 2-2-2　質問項目別 被害経験割合

表 2-2-3　被害経験割合の比較

項目	本調査　被害経験	前回調査（2020 年）
言葉による性暴力	18.8%	19.7%
同意のない身体的接触	7.7%	6.8%
同意のない性行為	1.6%	2.5%

表 2-2-4　加害者の属性

属性	言葉による性暴力（件数）	性的性的接触（件数）	同意のない性行為（件数）
慶大生（同級生）	34	18	4
慶大生（先輩）	32	7	1
慶大教職員	10	1	0
慶大 OB・OG	9	1	0
慶大生（後輩）	5	0	0
慶大事務職員	3	0	0
答えたくない	3	3	4
そのような経験はない	187	204	214
無回答	67	82	90
その他	1	1	0

表 2-2-5　性暴力が起こった状況

発生場所	言葉による性暴力（件数）	性的接触（件数）	同意のない性行為（件数）
飲み会の場	31	12	2
サークル活動中	22	5	0
部活動中	9	2	0
授業中	4	1	0
答えたくない	3	4	4
そのような経験はない	184	204	214
無回答	69	83	90
その他	15	7	3

表 2-2-6　オンラインでの性暴力

加害者の属性	件数
慶大生（同級生）	13
慶大生（先輩）	11
慶大教職員	3
慶大生（後輩）	2
慶大 OB・OG	1
慶大事務職員	1
答えたくない	4
そのような経験はない	200
無回答	83
その他	3

被害の媒体	件数
SNS	16
オンライン会議ツール	12
電話	5
メール	1
そのような経験はない	202
無回答	83
その他	0

被害の状況	件数
個人間のやりとり	14
オンライン授業	6
オンラインサークル	4
リプライ、コメントなど	4
オンライン飲み会	3
オンライン部活	0
そのような経験はない	202
無回答	84
その他	3

表 2-2-7　加害者の飲酒の有無

項目	回答数
はい	17
いいえ	37
時と場合による	1
そのような経験はない	178
わからない	18

第二項　被害者の状態

被害経験後に陥った状態について質問したところ、被害を受けた人のうち、75.0%の人が被害後何らかの影響を感じていることが分かった（表 2-2-8）。その影響のうち「心身に不調をきたした」「自分に自信がなくなった」が最も多かった。

被害後の学内の相談機関の利用状況及び満足度等について質問したところ、詳細は第三章第三節にて述べるが、被害者のうち 74.2%が相談していないことが明らかになった。被害を相談しなかった理由としては「連絡するほど深刻だと思っていなかった」ことが最も多く、続いて「自分で何とかできるものだった」が多かった。

表 2-2-8　被害者が経験した生活への影響

項目	件数
特に影響はなかった	24
心身に不調をきたした	18
自分に自信がなくなった	18
サークルや学生団体に行かなくなった、辞めた、変えた	12
人付き合いがうまくいかなくなった	12
夜、眠れなくなった	6
大学にしばらく行かなくなった、辞めた、変えた	3
携帯の番号や SNS のアカウントを削除した、変えた	3
そのような経験はない	173
無回答	69
その他	9

第三項　性暴力問題に対する問題意識と研修モジュール

大学における性暴力やその他の性的不正行為に対して、回答者がどの程度問題意識を持っているか尋ねたところ、「かなり問題視している」「まあまあ問題視している」の合計は 85.9%で、前回の数値 56.9%と比較してかなり増加した（図 2-2-9）。

性暴力への問題意識が高まることと並行し、周囲で性暴力やセクハラを見聞きした経験に関しても「はい」と答えた人が 24.6%と前回の 18.5％より増加した（図 2-2-10）。

性暴力を性暴力として認識できているか調査するため、性暴力に該当する行為とそうでない行為をリストアップし該当するものをチェックする形式を用いて調べた[10]。その結果、「ポルノを見せる」「性的な声掛け」「同意のないボディタッチ」を性暴力として認識している割合は概ね 5％から 23％程度増加していることがわかった（表 2-2-11）。このことから、回答者が性暴力として認識している行為の幅が拡大していると言える。

学内の相談先の認知度に関しては、一つも知らない人の割合が前回の 44.9%から 37.1%になった。第三章第三節で詳しく説明する。

次にコロナ禍でのオンライン化によって性暴力が増加したと思うかどうか質問したところ、以下のような結果になった（図 2-2-12）。本調査はオンライン化が進んだ 2020 年 10 月以降を対象としており、先述の通り何らかの性暴力被害にあった人の割合は前回調査のオフラインキャンパスでの被害の割合とほぼ同等だった。しかしながら、オンラインによって性暴力が「減ったと思う」と回答した人が約 4 割いることがわかった。

[10] 質問項目については付録を参照。ただし、例えば「性行為を拒否すると罵倒や人格否定をされる」など、被害の文脈によっては性暴力に該当する場合があるが、本調査においては考慮しない。

慶應義塾大学に入学してから、性暴力やその他の性的不正行為に関する研修モジュールや説明会を受講したか調査したところ、回答者の 28.1%が受講経験があり、前回の 15.7%から増加した（図 2-2-13）。このことは本節第三項で示した性暴力問題に対する問題意識の増加と、性暴力の認識の向上との連関があるといえる。研修モジュールの内容に関しては、表 2-2-14 の通りである。

この点に関して第三章第三節で詳しく述べるが、大学の職員に性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合、キャンパスの職員が公正な調査を行う可能性はあると思うかという質問に対して、回答者の 66.1%が「かなりある」、「まあまあある」と回答した。加えて、性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合キャンパスの職員がその報告を真剣に受け止める可能性はあると思うかどうかに関しては、「かなりある」「まあまあある」は全体の 70.3%だった。

一方で、学生が大学で性的暴行やその他の性的不正行為の事件を報告した場合にどうなるかについての知識に関して、「かなり詳しい」「まあまあ詳しい」と答えたのは全体の 16.3%で、前回の 15.4%からあまり変わっていない（図 2-2-15）。

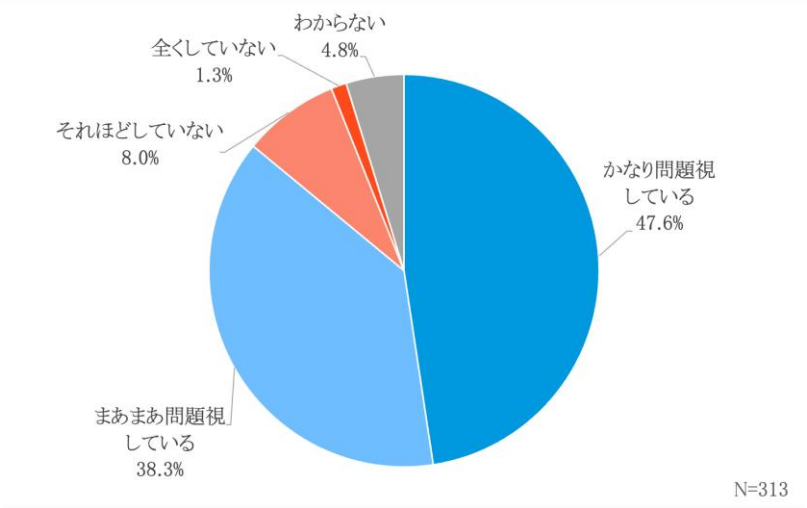

図 2-2-9　大学での性暴力、その他性的不正行為にどの程度問題視しているか割合

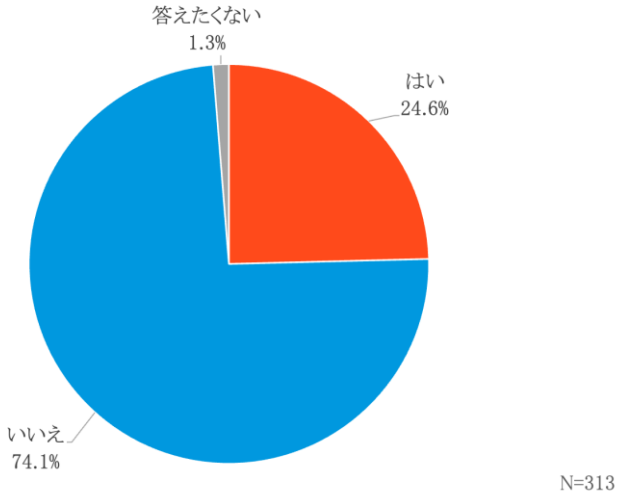

図 2-2-10　周囲で性暴力やセクハラを見聞きした経験の割合

表 2-2-11　下記の行為のうちどれを性暴力と認識しているか

	項目	回答割合	前回の回答割合
性暴力に該当	レイプ	98.40%	99.4%
	避妊に協力しない	94.25%	92.2%
	同意のないキス	92.65%	90.3%
	セクハラ	90.73%	86.6%
	デート DV	88.82%	86%
	ポルノを見せる	88.50%	65.4%
	性的な言葉掛け	86.90%	79.8%
	のぞき	81.47%	80.7%
	同意のないボディタッチ	79.55%	71%
	盗撮	79.55%	80.1%
	ストーカー	69.97%	67.6%
性暴力に該当しない※	罵倒や人格否定	31.31%	31.8%
	悪口を言う	13.74%	8.4%
	無視する	6.39%	2.8%
	宿題を手伝わせる	5.75%	1.9%

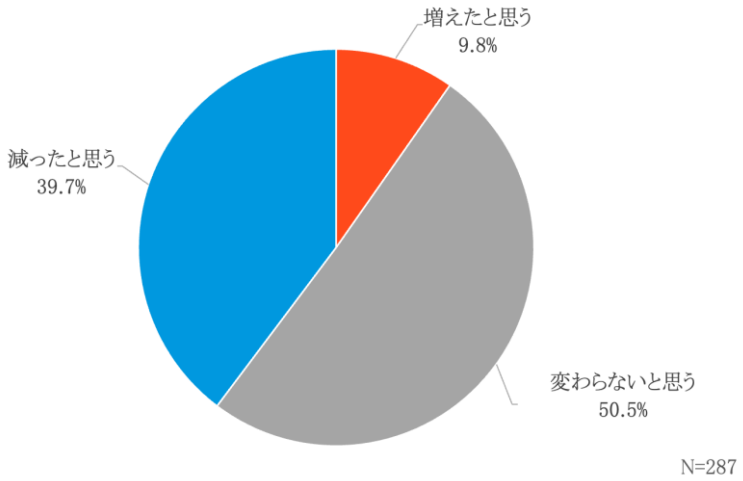

図 2-2-12　オンライン化で性暴力が増えたと思うか

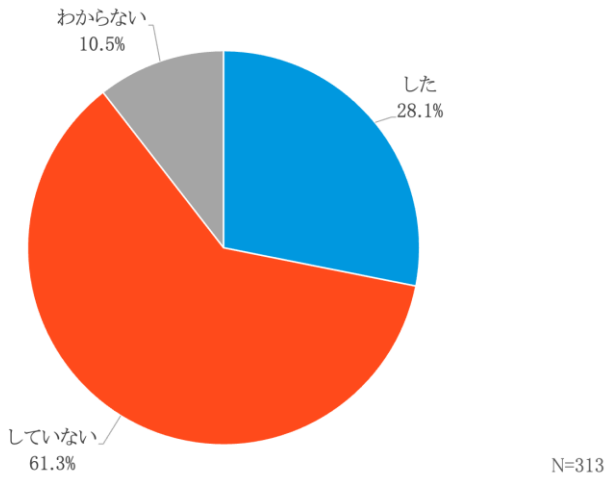

図 2-2-13　性暴力に関する研修モジュールを受けたか

表 2-2-14　研修モジュールで触れられた内容

項目	件数
性的同意について	60
性暴力などの性的非行の定義について	58
性暴力を受けた際の相談先や対応について	54
性暴力の被害を防ぐ方法について	52
性暴力の加害者にならない方法について	51
性暴力やその他の性的非行を防止する方法について	48
受講したが内容までは覚えていない	20
受講していない	137
無回答	75
その他	4

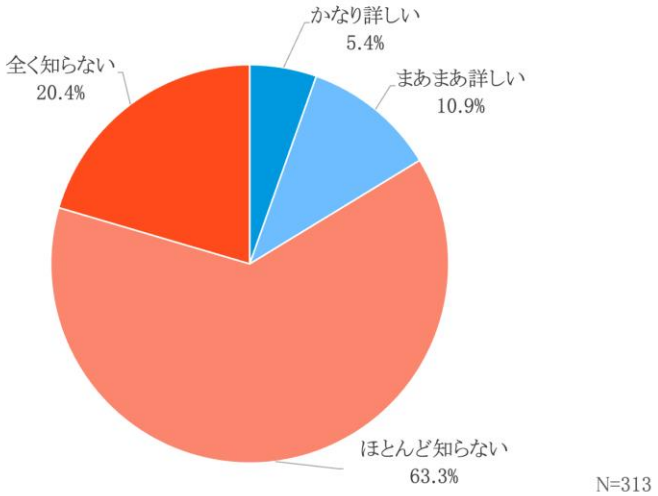

図 2-2-15　学生が大学で性的暴行やその他の性的不正行為の事件を報告した場合にどうなるかについてどの程度の知識を持っているか

第三章　分析

第二章では調査結果の回答結果を俯瞰した。本章ではより深い分析を用い、学内の性暴力に関する実態を明らかにする。

第一節　被害実態の分析

本節では調査で得られた性暴力被害に関する回答をより詳細に分析する。端的に結論を述べれば、本調査が到達できる限りにおいて、学内の性暴力被害は GI や学年に大きく依存する構造的な問題であることがわかった。

第一項　女性の被害

図 3-1-1 は本調査を通じて何らかの性暴力被害経験（言葉による性暴力・性的接触・同意のない性行為・オンラインでの性暴力）があると回答した割合を、学年及び GI 別に集計すると、女性回答者は男性回答者に比べて 3 倍近くの被害経験があることを示している。

被害の類型を GI 別に確認すると、女性回答者の被害経験割合はいずれの被害類型においても、男性回答者の被害経験割合を上回っている（表 3-1-2）。特に言葉による性暴力と性的接触の被害経験では、女性回答者は男性回答者に比べて 4 倍以上に及ぶ。

次に、比較的回答数の多かった言葉による性暴力の加害者属性について着目すると、女性男性ともに同級生や先輩からの被害が多いことには変わりはない。一方で、少数ではあるが女性回答者の方が後輩や OB・OG や教職員、事務職員など幅広い属性から被害を受けている（表 3-1-3）。

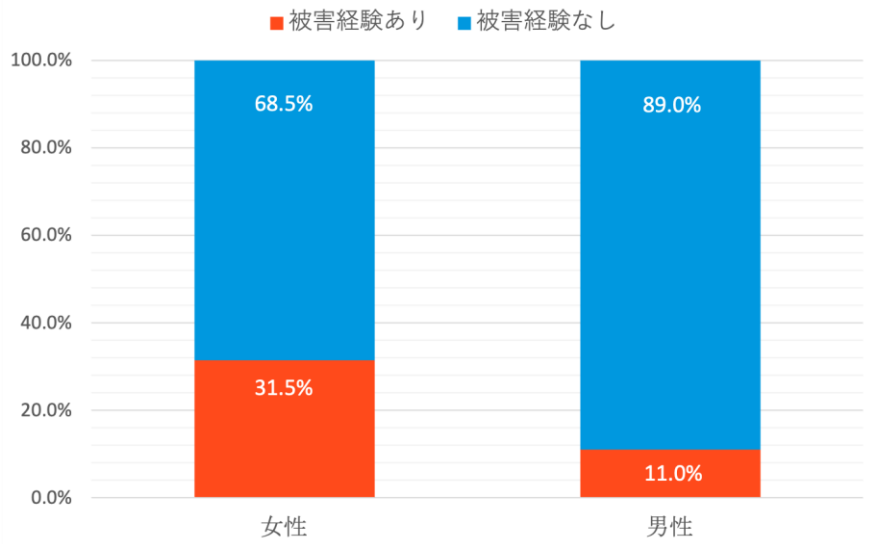

図 3-1-1　GI 別何らかの被害経験有無

表 3-1-2　GI 別性暴力被害の詳細

	回答者数	言葉による性暴力	性的接触	性行為	オンライン

女性	184 人	48 人　26.08%	18 人　9.78%	4 人　2.17%	21 人　11.41%
男性	118 人	8 人　6.77%	3 人　2.54%	0 人　0%	6 人　5.08%

表 3-1-3　GI 別言葉による性暴力の加害者属性

	慶大生（同級生）	慶大生（先輩）	慶大生（後輩）	慶大 OB・OG	慶大教職員	慶大事務職員	答えたくない	その他
女性	26	26	4	6	8	2	2	0
男性	5	4	0	2	1	0	1	1

※複数回答。

第二項　学年による被害経験の違い

次に被害実態について GI 及び学年に基づいて分析する。図 3-1-4 は何らかの性被害を受けた経験があると回答した割合を GI と学年によって分類したものである。なお、学年については母数が多い学部生に絞っている。この図からは、①学部 1 年生であっても回答した女子学生の約 4 人に 1 人が何らかの性暴力被害に遭っている、②回答した女子学生の被害は学年が上がるにつれて上昇しており、学部 4 年生は 2 人に 1 人の割合で被害経験がある、③回答した男性には上記のような傾向はみられない、といった点がわかる。

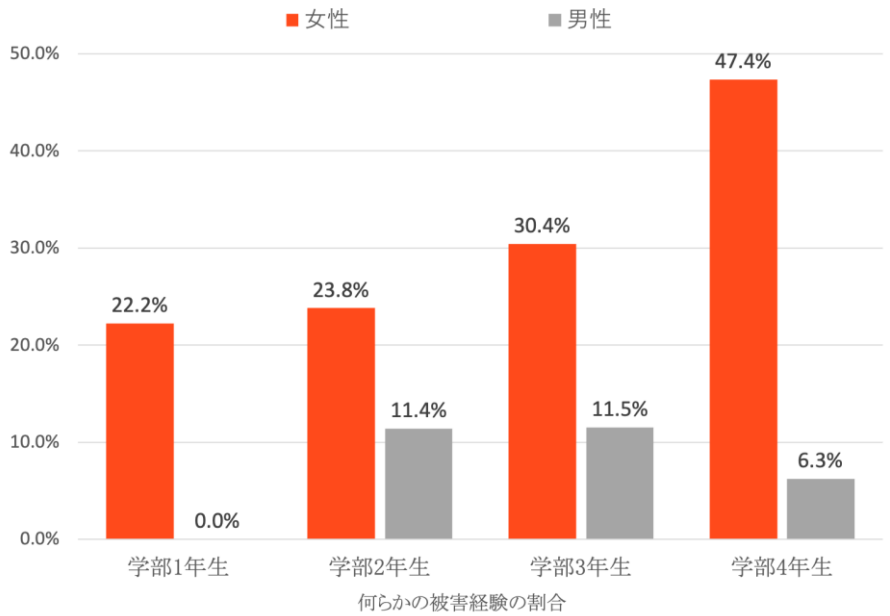

図 3-1-4　学年 GI 別性暴力被害経験

学部 1 年生と学部 4 年生女子の被害実態の詳細を確認すると、第一に被害類型については、学部 1 年生は性的な言葉による性暴力の被害経験割合が 18.52%、性的接触が 7.41%、オンラインでの被害が 11.11%となっている。学部 4 年生の回答ではオンラインを除く全ての項目が増加しており、特に言葉による性暴力の被害経験が 42%に及んでいる（表 3-1-5）。

表 3-1-5　学部 1 年生・4 年生女子の被害経験割合

	回答者数	言葉による性暴力	性的接触	性行為	オンライン
学部 1 年生女子	27 人	18.52%	7.41%	0%	11.11%
学部 4 年生女子	38 人	42.11%	13.16%	2.63%	10.35%

次に加害者の属性及び発生場所について分析すると、学年によって加害者の属性には大きな違いは見られない[11]。いずれの性暴力の類型であっても、同級生もしくは先輩からの被害が多い。ただし 4 年生の言葉による性暴力の被害については後輩や OB・OG、教職員など多くの属性から被害を受けている。発生場所の多くはオフラインの場合は飲み会の場であった。

表 3-1-6　学部 1 年生女子に対する主要加害者属性と発生場所

	言葉による性暴力	性的接触	オンラインでの性暴力
1 位	同級生（4 件）	同級生（4 件）	先輩（3 件）
2 位	先輩（2 件）	先輩（1 件）	同級生（1 件）
主要な発生場所	飲み会の場	飲み会の場	個人間のやり取り、オンライン授業

表 3-1-7　学部 4 年生女子に対する主要加害者属性と発生場所

	言葉による性暴力	性的接触	オンラインでの性暴力
1 位	同級生、慶大生先輩（それぞれ 10 件）	同級生（4 件の回答）	同級生、他大の学生（それぞれ 1 件の回答）
2 位	後輩、OB・OG、教員、職員（それぞれ 2 件）	先輩（1 件の回答）	
主要な発生場所	飲み会の場、サークル活動中	飲み会の場	オンライン飲み会

第二節　研修モジュール

第二章で示したように、前回の調査に比べ研修モジュールを受講した経験がある割合は 13 ポイント余り増加した。本節では、この事実を踏まえ、研修モジュールの受講有無の割合の変化の背景と、その効果および限界について検証する。

[11] 被害の詳細については任意回答かつ複数回答を許容しているため、他の質問項目における被害件数等とは数値が異なる。また、同意のない性行為については該当する回答数が 1 件だったため本項においては省略した。

まず、学部ごとに研修モジュールの受講経験有無には大きな差が生まれている（表 3-2-1）。回答者数の多かった上位 10 学部・研究科を比較すると、総合政策学部・環境情報学部がともに 50%以上の学生が受講経験があると回答しているのに対し、その他の学部・研究は最大でも 30%程度にとどまっている。この背景には、SFC2 学部の必修科目である「心身ウェルネス」に性に関する話題が含まれていることが挙げられる[12]。

表 3-2-1　学部ごと研修モジュール受講割合（回答者数上位 10 学部・研究科）

順位	学部	あると回答した割合	あると回答した人数	総数
1 位	総合政策学部	53.66%	22	41
2 位	環境情報学部	50.00%	16	32
3 位	法学部	30.99%	22	71
4 位	経済学部	27.27%	3	11
5 位	理工学部	23.08%	6	26
6 位	商学部	22.22%	2	9
7 位	政策・メディア研究科	20.00%	3	15
8 位	文学部	14.10%	11	78
9 位	メディアデザイン研究科	0.00%	0	15
9 位	通信教育課程	0.00%	0	4

学年別の受講割合について比較すると、学部 1 年生から学部 4 年生までの受講有無には多少のばらつきはあるものの、大きな変化は見られない。対して、学部生と大学院生を比較すると、いずれの学年においても大学院生の研修モジュールの受講経験は学部生よりも少ないことがわかる。

表 3-2-2　学年別研修モジュール受講割合

学年	あると回答した割合	「受講経験あり」の人数	総数
学部 1 年	37.50%	18	48
学部 2 年	23.08%	18	78
学部 3 年	35.06%	27	77
学部 4 年	29.82%	17	57
修士 1 年	14.29%	2	14
修士 2 年	8.33%	1	12

[12] 慶應義塾大学, https://syllabus.sfc.keio.ac.jp/courses/2022_27261?locale=ja

博士１年	0.00%	0	1
博士２年	0.00%	0	3
教員	27.27%	3	11

次に研修モジュールの受講経験が性暴力への認識に与える影響について検討する。

第一に、「Q33. 学生が大学で性的暴行やその他の性的不正行為の事件を報告した場合にどうなるかについて、あなたはどの程度の知識を持っていますか？」の回答結果を、研修モジュールの受講経験有無で集計した（図 3-2-3）。研修モジュールの受講経験がある人は「被害相談後の大学の対応」について「かなり詳しい・まあまあ詳しい」と回答した割合が25%であり、受講していない人に比べて 12 ポイント以上高い。また「全く知らない」と回答した割合は受講経験のある人は 11.36%であり、受講経験がない人に比べて 12 ポイント近く少ない。一方で、大学の対応を「ほとんど知らない」と回答した割合は受講有無によって差はほとんどない。

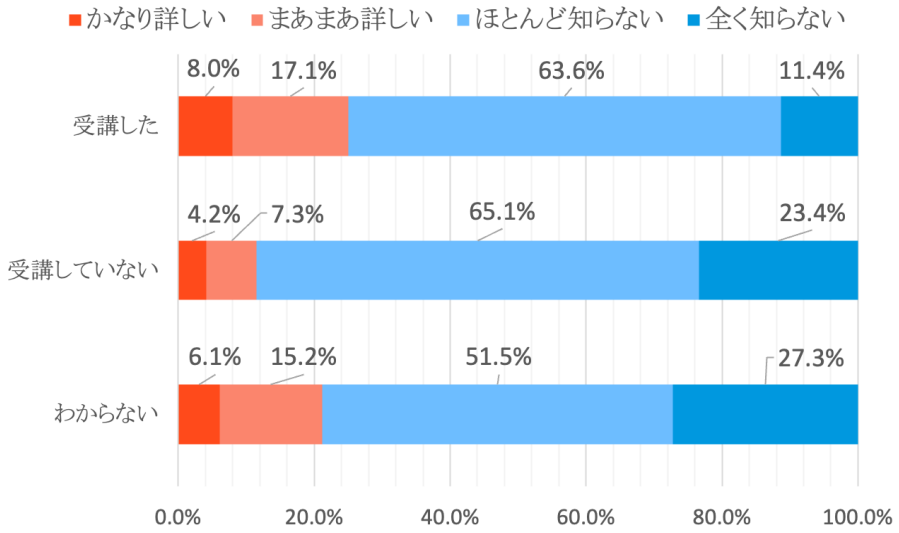

図 3-2-3　研修モジュール受講有無別性暴力被害発生時の学内の対応に関する知識

第二に知っている相談機関の数（Q23）と研修モジュールの受講有無の関係を見ると、研修モジュールの受講経験があると回答した人は、提示した 6 か所の相談機関のうち、平均して 1.98 か所を回答している。 しかし、受講経験がない人と受講有無を覚えていない人の回答は、平均して 0.86 か所の回答にとどまっている（表 3-2-4）。

表 3-2-4　研修モジュール受講有無別相談機関の認知度

受講有無	知っている相談機関数（平均）	回答者数
受講経験あり	1.98 か所	88 件の回答
受講経験なし・わからない	0.86 か所	225 件の回答

第三に性暴力の類型に関する知識の差を検討する。図 3-2-5 に示したように、Q32 で提示した 11 個の性暴力の類型に対する回答割合を比較した。その結果、受講経験の有無に関わ

らず 75%以上の人が性暴力の類型を 9 個以上回答できていた。対して回答数が少ない層、すなわち性暴力の認知が乏しい層に目を向けると、受講経験のある人は最低でも 3 つ以上を回答しているのに対して、受講経験がない人や受講有無を覚えていない人の中には性暴力の類型を 2 つ以下しか回答できていない人も存在する。

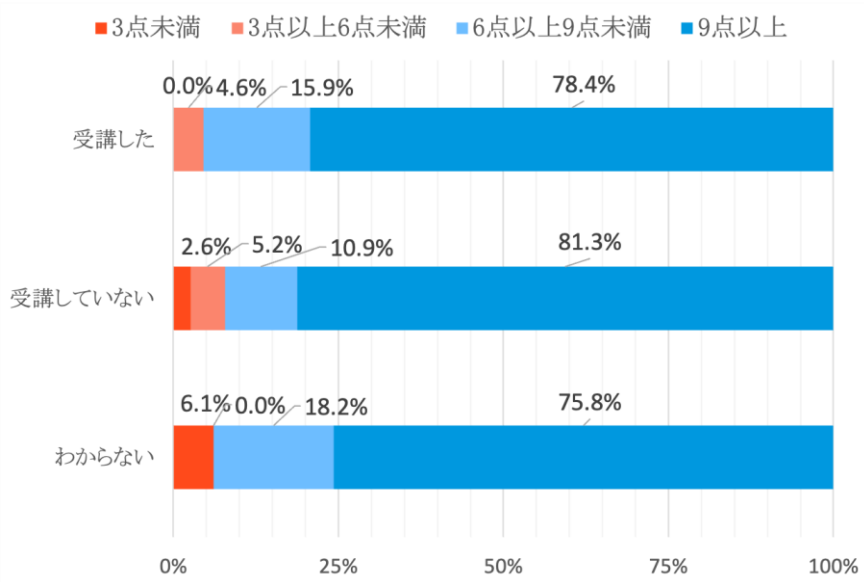

図 3-2-5　研修モジュール受講有無別性暴力の認知度

第四に受講経験の有無が回答者の性被害の認識に与える影響について検討する(表 3-2-6)。各性暴力の類型について、被害経験の有無を研修モジュールの有無によって集計すると、性的接触や同意のない性行為については、受講経験による差はみられない。対して、言葉による性暴力やオンラインでの性暴力の被害経験については、研修モジュールを受講した経験のある人の方が、そうでない人に比べて 10 ポイント以上高い。

表 3-2-6　研修モジュール受講有無別被害経験

研修受講有無/性暴力被害経験	**言葉による性暴力**	性的接触	同意のない性行為	**オンラインでの性暴力**
受講経験あり	**27.27%**	9.09%	2.27%	**15.91%**
受講経験なし	**15.10%**	6.77%	1.04%	**6.25%**
わからない	**18.18%**	9.09%	3.03%	**6.06%**

このことは必ずしも、「性暴力に関する研修を受けると性暴力被害に遭う」という言説を支持するものではない。むしろ性的接触や同意のない性行為など一般的に認知度の高い性暴力だけではなく、言葉による性暴力やオンラインでの性暴力など、本来性暴力として認識されるべき事象を性暴力として正しく認識できた結果であるともいえる。このことは、第二章で示したように、性暴力として捉えられる範囲が拡大していることとも符合する。

この結果を踏まえると 2 つの仮説が提示される。第一に、研修モジュールを受講していない人は性暴力の被害を受けていたとしてもそれを認識できておらず、その結果実際のキャンパス内での性暴力被害は本調査の結果を上回る可能性がある。第二に将来的に研修モジュー

ルの受講割合が高くなることにより、次回以降の実態調査では性暴力被害経験割合が高くなる可能性がある。もちろん、キャンパス内での性暴力被害は許容できるものではないが、必ずしも被害件数の悪化がキャンパスの現状の悪化を指し示すものではなく、より詳細な調査・分析を実施する必要がある。

以上の分析を踏まえると、研修モジュールの受講有無の割合の変化の背景とその効果および限界について、以下のように要約できる。

- 研修モジュールの受講割合は前回に比べて 13 ポイントほど上昇したものの、受講割合は全体の 1/4 程度にとどまっている。
- 研修モジュールの受講割合はキャンパスによる偏りがある。
- 大学院生は学部生に比べて研修モジュールを受講した経験が少ない。
- 現在提供されている研修モジュールは、受講者に対して言葉による性暴力やオンラインでの性暴力が、性暴力として該当することを認識させることに役立っている。
- 現在提供されている研修モジュールは、受講者に対して学内で性暴力が発生した際の相談先や大学における対応に関する知識を提供できているものの、その内容は十分ではない。

第三節　学内の相談機関

本節では性暴力被害に対応可能な学内の相談機関及び学生の大学に対する信頼度について分析をする。本調査では性暴力被害の相談先として、学生相談室（三田・日吉・矢上・芝共立）、心身ウェルネスセンター（SFC）、ハラスメント防止委員会、保健管理センター（日吉、三田、SFC、矢上、信濃町）、法律相談（三田）、ストレス・マネジメント室（信濃町）の計 6 機関を提示した。

第一項　大学に対する信頼度

本調査では Q28 及び Q29 において大学が性暴力に誠実に対応すると思うかどうかを問う質問を設定した。本報告書ではこれらの回答を用いて回答者の大学への信頼度を評価する。

第一に Q28「誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合、キャンパスの職員が公正な調査を行う可能性はあると思いますか？」に対する回答では、回答者の 66.1%が「かなりある」「まあまあある」と回答している（図 3-3-1）。前回の調査での同様の質問では「かなりある」「まあまあある」と回答した割合が 54.1%であった。

次に Q29「誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的な不正行為を報告した場合、キャンパスの職員がその報告を真剣に受け止める可能性はあると思いますか？」の回答は、「かなりある」「まあまあある」を合わせて 70.3%となっている（図 3-3-2）。前回の調査では「かなりある」「まあまあある」の合計が 65.3%である。

一方で、信頼度に関して「あまりない」「絶対にない」の割合が、Q28 では全体の約 3 割、Q29 では約 2 割だった。

上記の 2 つの回答結果からわかるように、概ね 6 割から 7 割程度の回答者が性暴力発生時の大学の対応に信頼感を感じていること、またその割合が上昇していることがわかった。

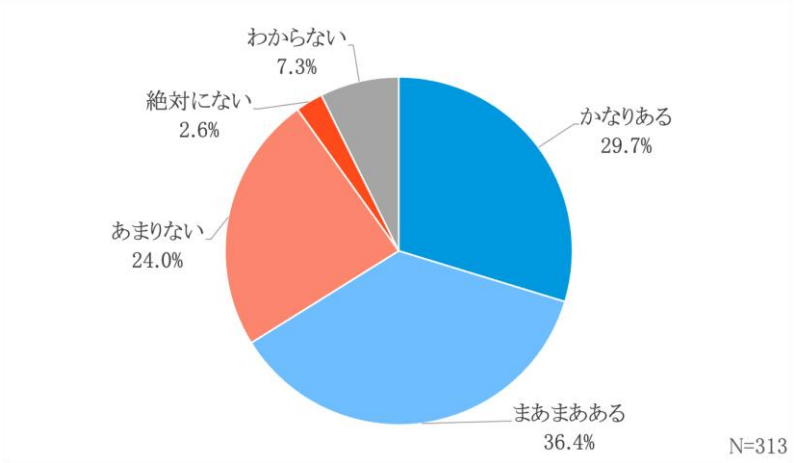

図 3-3-1　「誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合、キャンパスの職員が公正な調査を行う可能性はあると思いますか？」

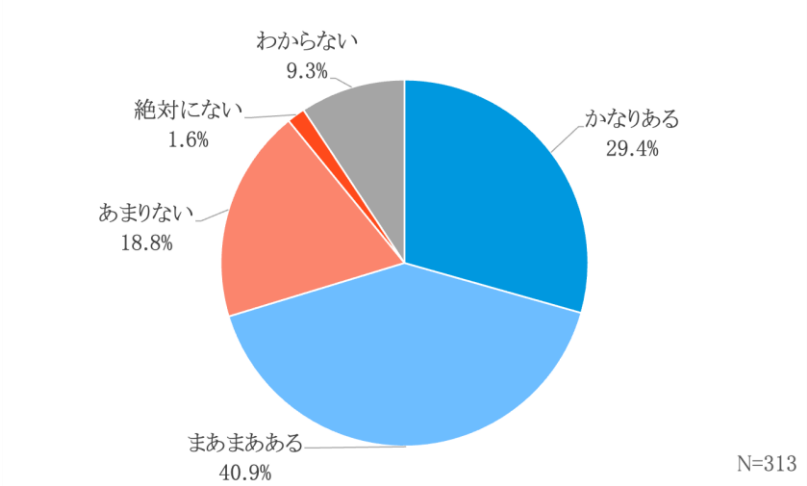

図 3-3-2　「誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的な不正行為を報告した場合、キャンパスの職員がその報告を真剣に受け止める可能性はあると思いますか？」

第二項　相談機関の認知度

本調査 Q23 にてそれぞれの相談機関を知っているかどうかを選択式で提示した。その結果、学生相談室は約半数の回答者に認知されており、次いで SFC の心身ウェルネスセンターやハラスメント防止委員会が 20%程度認知されていることがわかった（表 3-3-3）。

一方で、いずれの相談機関も知らないと回答した割合は 37%である。前回の調査では同様の回答は 48.6%であったことから、いずれかの相談機関を知っている回答者の割合はこの 2 年間で 10%程度増加した。

ただし、学部生の 69.23%が相談機関を全く知らないか一か所のみ知っている状況であり、また学部生の中で学年によって大きな差はない（表 3-3-4）。このことは、大学入学後に相談機関に関する知識を得る機会が限られていることを示唆している。

表 3-3-3　相談先の認知度

相談先	件数	認知度
学生相談室（三田・日吉・矢上・芝生田）	159	50.80%
心身ウェルネスセンター（湘南藤沢）	69	22.04%
ハラスメント防止委員会	67	21.41%
保健管理センター（日吉・三田・湘南藤沢・矢上・信濃町）	44	14.06%
法律相談（三田キャンパス 南校舎 地下一階）	18	5.75%
ストレス・マネジメント室（信濃町）	10	3.19%
上記のどれも知らなかった	116	37.06%

表 3-3-4　学年別認知している相談先の個数

学年 / 認知している相談機関数	0	1	2	3	4	5	6	回答者数
学部 1 年	39.58%	31.25%	20.83%	8.33%				48
学部 2 年	30.77%	38.46%	20.51%	3.85%	3.85%		2.56%	78
学部 3 年	41.56%	29.87%	16.88%	6.49%	2.60%	2.60%		77
学部 4 年	28.07%	36.84%	19.30%	8.77%	5.26%		1.75%	57
学部生全体	35.00%	34.23%	19.23%	6.54%	3.08%	0.77%	1.15%	260

第三項　被害を相談した際の対応

回答者に性暴力被害に遭った後の相談機関の利用有無等について質問したところ、「相談していない」の回答が最も多く、被害経験のある人のうち 74.2%に及んだ。次に回答が多いのは学生相談室であった（表 3-3-5）[13]。

表 3-3-5　利用した相談先

相談先	回答数
していない（被害にあった）	49
学生相談室（三田・日吉・矢上・芝生田）	8
心身ウェルネスセンター（湘南藤沢）	2
ハラスメント防止委員会	1
ストレス・マネジメント室（信濃町）	0
法律相談（三田キャンパス 南校舎 地下一階）	0
保健管理センター（日吉・三田・湘南藤沢・矢上・信濃町）	0
していない（被害にあっていない）	252
答えたくない	6

[13] 任意回答かつ複数選択を許容しているため、被害数と回答数は異なる。

次に相談機関を利用しなかった理由について、最も多かった回答は「連絡するほど深刻だと思っていなかった」が 31 件あり、次いで「自分で何とかできるものだった」が 25 件程であった（表 3-3-6）。また、「学校のリソースが私に必要な助けを与えてくれるとは思わなかった」が 13 件、「どこに行けばいいのか、誰に言えばいいのかわからなかった」が 10 件ほどあった。

表 3-3-6　被害を相談しなかった理由

理由	件数
連絡するほど深刻だとは思っていなかった。	31
自分で何とかできるものだった。	25
学校のリソースが私に必要な助けを与えてくれるとは思わなかった。	13
どこに行けばいいのか、誰に言えばいいのかわからなかった。	10
その人（加害者）がトラブルに巻き込まれることを望んでいなかった。	6
恥ずかしい、精神的につらいと思った。	5
学問的、社会的、職業的にマイナスの結果を恐れていた。	4
復讐されることが怖かった。	3
誰も信じてくれないと思っていた。	2
秘密にされないかと心配していた。	1
学校が休校中だった。	1
無回答	250
その他	3

次に相談機関を利用した場合にその満足度について質問した。利用経験のある回答者が少ないため正確な評価は難しいものの、全く満足しなかったという回答が複数あった（表 3-3-7）。

また自由記述欄において、学内の相談機関や性暴力について大学に相談した際の対応に関する詳細なコメントを募集した。その一部を抜粋して紹介する。

- 大学が真摯に対応してくれた事例があるのかわからないため、相談して解決すると信じづらい。
- どの相談機関に連絡すればよいかわからない。
- ハラスメント防止委員会に相談したが適切に対応してもらえなかった（複数名からの回答）。
- （教員からの回答）留学生が被害にあった場合に、語学力や制度に関する知識、弁護士費用などで日本人学生よりも不利な立場に立たされている。

表 3-3-7　相談機関利用の満足度

内容	回答数

普通	6
まあまあ満足した	3
全く満足しなかった	3
大変満足した	1

小結

本節について要約すると、本調査によって明らかになったことは以下である。

- 性暴力対策に対する大学への信頼度と学内の相談機関の認知度が上昇している。しかし、相談機関の内認知度が最も高い学生相談室であっても約 50%にとどまっており、それ以外の相談機関の認知度は相対的に低い状態が続いている。
- 相談機関の認知度は高まっているものの、実際に支援を必要としている性暴力被害者に届いていなかったり、相談機関が提供できるリソースがわからないなどの理由から、性暴力被害に遭ったとしても相談機関が利用されていない現状が続いている。
- 加えて、例え相談機関に相談したとしても、特に一部の相談機関などではその対応に満足することができなかったという回答が寄せられた。

補記　性的マイノリティ・大学院生・教員の回答

本章では全回答者のうち、母数が少ないため前章までの分析結果には含めなかった GI がジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者、また大学院生および教員の集計結果について述べる。

第一節　ジェンダークィアおよびクエスチョニングの集計結果

本調査の Q5 では回答者の GI を調べた。回答者 313 名のうち、4 名がジェンダークィア、6 名がクエスチョニングと回答した。1 名は答えたくないと回答した（表 4-1-1）。ジェンダークィアとクエスチョニングの回答者は全体の約 0.03%であるため、母数の多い男性および女性の集計結果と安易に比較することはできない。

表 4-1-1　回答者の GI

GI	回答者数
男性	118
女性	184
ジェンダークィア	4
クエスチョニング	6
答えたくない	1
総計	313

第一項　ジェンダークィアおよびクエスチョニングの被害状況

GI がジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者のうち複数人は何かしらの性暴力の被害経験があると回答した。ただし母数が少数であり、回答者の被害内容の詳細に関してはプライバシー保護のため言及を避ける。

第二項　ジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者と性暴力に対する意識

大学における性暴力や性的不正行為をどの程度問題視しているかという問いでは、ジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者 10 名のうち 8 名が「かなり問題視している」「まあまあ問題視している」と回答した(表 4-1-2)。

さらに性暴力や性的不正行為の報告に対してキャンパスの職員が公正な調査を行う可能性はあるかという質問では、ジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者のうち 6 名が「あまりない」と回答した(表 4-1-3)。

これよりジェンダークィアおよびクエスチョニングの回答者は学内の性暴力および性的不正行為を問題視しており、性暴力や性的不正行為に対するキャンパスの調査の公正性を疑問視していることがわかった。

表 4-1-2　GI と学内の性暴力および性的不正行為をどの程度問題視しているか

	かなり問題視している	まあまあ問題視している	それほどしていない	総計
ジェンダークィア	3	1	0	4
クエスチョニング	5	0	1	6
総計	8	1	1	10

表 4-1-3　GI と、誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合にキャンパスの職員が公正な調査を行う可能性があると思うか

	かなりある	まあまあある	あまりない	総計
ジェンダークィア	1	0	3	4
クエスチョニング	2	1	3	6
総計	3	1	6	10

第二節　大学院生の集計結果

回答者 313 名のうち大学院生は合計 30 名であり、修士課程 1 年生が 14 名、修士課程 2 年生が 12 名、博士課程 1 年生が 1 名、博士課程 2 年生が 3 名であった（表 4-2-1）。

慶應義塾大学の公式情報によると、慶應義塾大学大学院前期博士課程（修士課程）の学生数は 2,985 名、後期博士課程（博士課程）の学生数は 1,426 名である。本調査に回答した大学院生の割合は約 0.68%である[14]。

表 4-2-1　回答者のうち大学院生の人数

所属	回答者数
修士 1 年	14
修士 2 年	12
博士 1 年	1
博士 2 年	3
総計	30

[14] 慶應義塾大学学生数（2022 年 5 月現在），https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/data/2022-university.pdf

表 4-2-2　大学院生の回答者の GI

	男性	女性	ジェンダークィア	総計
総計	12	17	1	30

第一項　大学院生の被害状況

大学院生の性暴力被害経験を調べると以下のような結果になった。回答者のうち大学院生は母数が少ないため学部生と単純比較はできないが、大学院生の回答者のうち 3 人に 1 人が何かしらの被害に遭っている(表 4-2-3)。詳細な被害実態をみると、特に性的な声かけ、オンラインでの性暴力の被害、またハラスメントを見聞きした経験において学部生より高い割合になっている。(表 4-2-4)。

表 4-2-2　大学院生の被害状況

	被害経験あり	被害経験なし	総計
男性	2	10	12
女性	7	10	17
ジェンダークィア	1	0	1
総計	10	20	30

表 4-2-4　学部生と大学院生の被害経験比較

属性/性暴力被害経験	**言葉による性暴力**	性的接触	同意のない性行為	**オンラインでの性暴力**	**ハラスメントを見聞きした経験**
学部生	**17.69%**	8.08%	1.54%	**8.08%**	**22.31%**
大学院生	**30.00%**	6.67%	3.33%	**13.33%**	**46.67%**

第二項　大学院生の回答者と性暴力に対する意識

大学における性暴力や性的不正行為をどの程度問題視しているかという問いでは、大学院生の回答者 30 名のうち 24 名が「かなり問題視している」、6 名が「まあまあ問題視している」と回答した。

表 4-2-5　大学院生は学内の性暴力および性的不正行為をどの程度問題視しているか

	かなり問題視している	まあまあ問題視している	総計
総計	24	6	30

第三節　教員の集計結果

第一項　教員の被害状況

本調査は慶應義塾大学の教職員も対象となっている。調査回答者 313 名のうち 11 名は教員であり、またそのうち複数名が何かしらの性暴力の被害に遭っている。ただし母数が少数であり、回答者の被害内容の詳細に関してはプライバシー保護のため言及を避ける。

被害内容としては「言葉による性暴力」や「性的接触」が挙げられた。加害者の属性としては他の教職員や授業の受講生が挙げられている。

また被害に遭った経験のある教員のうち全員が被害を相談しておらず、理由としては「学問的、社会的、職業的にマイナスの結果を恐れていた」「復讐されることが怖かった」が挙げられている。教職員のキャリア形成には上司や先輩、他の教員との関係が大きく影響していることから、教職員は復讐や仕事への不利益を懸念し被害を相談しづらいということが考えられる。

第二項　教職員の性暴力に対する意識

「あなたは大学での性暴力や性的不正行為をどの程度問題視していますか？」という問いでは、回答者の教員のうち 9 名が「かなり問題視している」、2 名が「まあまあ問題視している」と回答した（表 4-3-1）。

さらに性暴力や性的不正行為の報告に対してキャンパスの職員が公正な調査を行う可能性はあるかという質問では、教員の回答者 11 名のうち 8 名が「かなりある」「まあまあある」と答えた(表 4-3-2)。教員によるキャンパスの相談機関の信頼度は比較的高いと推測できる。

表 4-3-1　教員は大学内の性暴力や性的不正行為をどの程度問題視しているか

	かなり問題視している	まあまあ問題視している	総計
教員	9	2	11

表 4-3-2　誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合にキャンパスの職員が公正な調査を行う可能性があると思うか　教員の回答

	かなりある	まあまあある	あまりない	わからない	総計
教員	5	3	1	2	11

第四章　結語

第一節　調査結果のまとめ

本調査の目的は、第一章でも述べたように、①学内の性暴力被害の実態を明らかにすること、②学内の性暴力の認識の変化を明らかにすること、の 2 点である。これらの目的について、得られた調査結果をまとめ、それぞれについて考察する。

第一項　学内の最新の被害実態

被害件数

回答者の約 24.0%が本調査の定義する 4 類型のいずれかの性暴力被害を受けたと回答しており、前回調査を行わなかったオンラインでの性暴力を除く 3 類型の性暴力のすべての被害件数の数値が前回調査から大きな変動は見られなかった（第二章第二節第一項）。

加害者属性としては、前回調査では先輩が最多に挙げられたが、本調査ではいずれの被害においても同級生が最多であった。性暴力被害の発生状況は、飲み会の場が最も多く、それに続いてサークル活動中での被害が多いという傾向は前回調査と変わっていない。

コロナ禍のオンラインキャンパスライフにおいて、回答者全体の 8.9%が SNS やオンライン会議ツールを通して何らかの性暴力を受けたことが判明した。被害の媒体は SNS やオンライン会議ツールが多く、開けた空間ではなく個人間のやりとりで被害が発生している。

女性の被害

第三章第一節第一項にて、女性回答者は男性に比べて 3 倍近くの被害経験があることが判明した。GI ごとの総数で見た際の割合で比較すると、言葉による性暴力と性的接触においては女性は男性に比べて 4 倍以上の被害経験がある。

また第二項では①学部 1 年生であっても回答した女子学生の約 4 人に 1 人が何らかの性暴力被害に遭っている、②女子学生の被害は学年が上がるにつれて上昇し学部 4 年生は 2 人に 1 人の割合で被害経験がある、③男性には上記のような傾向はみられないという三点の問題点が浮き彫りとなった。

被害の内訳を確認すると、学部 1 年生に対し学部 4 年生ではオンラインを除く全ての項目が増加しており、特に言葉による性暴力の被害が 42%に上り、4 年間の学生生活で多くの女性が言葉による性暴力の被害を受けている。また、加害者の属性の傾向について学部 1 年生と 4 年生を比較すると、いずれも先輩もしくは同級生からの被害が大半であるものの、4 年生は教員や職員、OB・OG など学生以外の属性の加害者からの被害も発生している。

考察

学内の性暴力被害について、2020 年度調査と比較して全体的には被害経験割合などに大きな変化は見られなかった。しかし、その内訳を見ると同級生が最も多い加害者属性として挙げられ、またオンラインでの性暴力も発生していることが分かった。これらのことはコロナ禍でのキャンパスライフや人間関係の構造の変化に関連していると考えられる。すなわち、コロナ禍によりサークルや部活など上下関係が発生する組織への所属が減少した一方で、授

業や SNS などで同級生との関わりが増加した結果、性暴力の加害者の傾向も変化したと考えられる。

また、本調査を通じて、多くの女子学生がキャンパスライフのなかで、性暴力被害の危険性に曝されている可能性があることがわかった。この状況は性暴力のない「安全なキャンパス」が実現できているとは言い難いだけでなく、男女間で学内で性暴力の被害に遭うかもしれないという心理的負担にも格差が生まれている可能性がある。

第二項　学内の性暴力に対する認識の変化

性暴力の認識

性暴力を性暴力として認識することに関する認知度は前回から傾向はほとんど変わっていない（第二章第二節第三項）。一方で「ポルノを見せる」「性的な声掛け」「同意のないボディタッチ」などを性暴力の事例として認識できる人の割合は増加した。

大学における性暴力やその他の性的不正行為に対する問題意識については「かなり問題視している」「まあまあ問題視している」の合計は 85.9%であり、前回の数値 56.9%と比べて大幅に増加した。周囲で性暴力やセクハラを見聞きした経験に関しても「はい」と答えた人が 24.6%と、前回の数値 18.5%に比べ数値を伸ばした。

研修モジュール

研修モジュールの受講経験の有無は性暴力の認知に影響を与える可能性がある（第三章第二節）ものの、回答者の約 7 割が受講していないと明らかになった（第二章第二節第三項）。研修モジュールを受講した経験のある人はそうでない人に比べて言葉による性暴力やオンラインでの性暴力への被害経験割合が高く、同意のない性的な行為を性暴力として正しく認識できている。また性暴力に関する知識や相談機関に関する知識については、受講経験のある人の方が比較的豊富ではあるものの、その差は限定的である。このことから研修モジュールは性暴力の認知が全くない層に対し、最低限の知識を付与することに効果があるといえる。

しかし、研修モジュールの受講経験は 28.1％であり、前回より 13 ポイントほど上昇したものの約 7 割の回答者が受講していない（第二章第二節第三項）。この現状は、研修モジュールによる知識付与の効果を活用できていない。

相談機関

学内の相談機関を認知度は増加した（第三章第三節第二項）が、被害者の約 7 割が相談していない現状がわかった。学内のいずれかの相談機関を認知している回答者は 63%であり、前回の 51.4％より認知度は増加している（第三章第三節第二項）。特に学生相談室の認知度は約半数を超えていた。信頼度に関しては、概ね 6 割から 7 割程度の回答者が性暴力発生時の大学の対応に信頼感を感じ、割合が上昇している（第三章第三節第一項）。一方で、被害者の 74.2%が各種相談機関に「相談していない」と回答し、その理由として相談機関が提供できるリソースがわからないなどの理由が一定数挙げられており、相談期間の認知度、大学への信頼度は向上しているにもかかわらず、相談機関の支援が必要としている人の手に届いていない状況が明らかになった（第三章第三節第三項）。

考察

以上の結果を踏まえ、学内における一般的な性暴力に対する認識について考えると、以下のようにまとめられる。

まず、大半の学生が大学における性暴力の問題に関心を持つようになった。この背景にあるのは、社会的な性暴力問題への関心の高まりだけでなく、大学における取り組みなどが考えられる。このことは性暴力被害を大学に相談した場合の大学への信頼感が上昇していることからも裏付けられる。また、性暴力に関する具体的な知識として、レイプだけではなく性的な声掛けなども性暴力になりうるという認識は高まっているものの、学内の相談機関や大学に被害を相談した場合のプロセスについての認識の進みは緩やかである。

なお、上記の考察を踏まえ「①大学における性暴力に問題意識をもち、②大学への信頼感を感じ、③性暴力の定義についておおまかに認識しているものの、④相談機関等大学の取り組みを知らない」に該当する人数を追加で集計したところ、168 人（53.67%）で最多の属性となった[15][16]。

以上のことは、性暴力そのものの認識は広まっているものの、身近な出来事としての認識、すなわち「自分や友人が被害を受けるかもしれない」、「被害を受けたらどう対処すればよいのか」といった視点が不足していることを示唆している。被害者の 7 割が相談機関を利用しておらず、その理由の中には大学が提供するリソースが届いていないことが要因と思われる回答も一定数あったことからも、性暴力被害者に対する大学の対応などを積極的に発信することが重要である。

第二節　本調査の限界、今後の展望

本調査では学内の性暴力被害や関連する学内の取り組み等に関して、いくつかの事実を明らかにした。一方で本調査を実施し分析する上での多くの限界や制約があったことも事実である。

本調査ではインターネット上での任意回答という形で調査した。SNS での告知やつながりのある教職員の方を通じた学生への配布、Safe Campus 所属メンバーの個人的な告知といった人海戦術に頼らざるを得なかった。

そのため、本調査の回答が学内の普遍的な現状を表していないことは、回答者の学年や所属の偏りを見れば明らかである。特に、性暴力問題にそもそも関心のある学生や教員が回答していることが想定され、キャンパス全体の性暴力被害を正確に表現しているとは言えない。

---

[15] ①から④の条件をすべて満たす回答を集計した。
①：Q27 の回答が「かなり問題視・まあまあ問題視」の回答。
②：Q28 と Q29 のそれぞれの回答を「かなりある→5…全くない→1」として、Q28 と Q29 の合計が 5 より大きい回答。
③：Q32 で正しい性暴力の類型を 7 個以上回答できている回答。
④：Q23 の回答数に 2/3 を掛け最大 4 点とした上で、Q33 の回答を「かなり詳しい→4…全く知らない→1」の基準で変換した値と足し、その合計が 4 未満の回答。

[16] 第 2 位は 41 人（13.10%）で「性暴力に問題意識をもち、大学への信頼感を感じているものの、性暴力の知識がなく、相談機関等大学の取り組みを知らない」。
第 3 位は 30 人（9.58%）で「性暴力に問題意識をもち、大学への信頼感を感じておらず、性暴力の知識があり、相談機関等大学の取り組みを知らない」。

また、教員や大学院生、ジェンダークィアおよびクエスチョニングの GI を持つ回答者のデータについては、属性による傾向を分析するためにはあまりにも小規模な回答数しか集めることができず、補記に書き記す限りになってしまった。

本調査の自由記述では複数の英語での回答が見られており、その中には深刻な性被害を訴える回答も複数寄せられていた。Safe Campus の目的並びに本調査の趣旨を踏まえれば、そこに国籍や言語による差異が生まれることはあってはならない。そのため、次回以降の調査では多言語に対応する必要がある。

本調査では設問 15〜19（18 は欠番）においてオンライン上での性被害に関する設問を設定し、第二章で示したようにオンライン上でも性暴力が存在することを示した。しかしながら、他の性暴力類型に対する被害と比較する場合、「オンラインでの性暴力」には性的な画像を送信するなどのオンラインならではの性暴力がある一方で、オンライン上での性的不快発言など、本調査の「言葉による性暴力」と重複する性暴力が存在しており、本調査ではそれらを明確に制御することができていなかった。すなわち、オンライン上で言葉による性暴力の被害経験がある回答者が、設問 6 と設問 15 の両方に「被害経験あり」と回答した可能性と、いずれか一方にのみ「被害経験あり」と回答した可能性のいずれも排除できない。そのため、重複での集計を避けるため、オンライン上での性暴力発生件数とそれ以外の性暴力の発生件数を合算することはできない[17]。

第三節　提言

新入生ガイダンスの実施

入学後して間もない 1 年生の多くが何らかの性暴力被害に遭っていることが明らかになった。またその被害の多くは同級生からの被害である。これらのことを踏まえれば、来年度以降早期に新入生ガイダンスを実現することが、新入生から被害者も加害者も生み出さないために重要である。

しかしながら新入生ガイダンスの実現について、時間的な制約でそもそもガイダンスを実施することが困難であったり、講師を確保できないなどの問題が想定できる。そのため、性的同意や性暴力・相談機関などについてのリーフレットと解説用の動画を作成し、それらを他のガイダンスや必修授業などの合間に流すなどの手法も検討するべきである。

在学生に向けた情報発信

2 年生以上の在学生の中でも、性暴力被害の実態が深刻であることが明らかになった。しかしながら在学生の多くが一同に会する機会はほとんどないため、一律のガイダンスの実施は難しい。そのため、下記のような機関が主体的に啓発することが望ましい。

第一に大学当局の諸機関との連携である。例えば、本調査を通じて学部 4 年生女子が OB・OG から被害を受けていることを踏まえれば、各キャンパスの就職支援窓口であればいわゆる就活セクハラに遭った際の支援などについて積極的に情報発信することが可能だと考

[17] 但し、オンライン上での性暴力とそれ以外の性暴力被害経験の有無について論理和を求め、回答者ごとに何らかの性暴力被害経験を集計することは可能である。

えられる。また、国際センターであれば慶應に留学している学生への性暴力被害に関する支援体制の整備や留学生向けの性暴力抑止ワークショップの開催などが考えられる。

第二にサークルやゼミなどの枠組みを積極的に利用することである。現在、全塾協議会は傘下の約 200 の公認団体の代表者に対して性暴力防止ワークショップの受講を義務付けている。一方で全塾協議会傘下ではない公認団体や未公認団体への啓発活動は出来ていない。そのため、これらの団体を直接管理することができる大学当局が主体的に性暴力抑止のための取り組みを実施すべきである。また、ゼミ単位で啓発資料を配布したり、性暴力抑止に向けたガイドラインを策定することも、上級生に対して性暴力に関する情報を提供することも考えられる。

相談機関の利用促進

学内の相談機関はその認知度は高まっているものの、具体的にどのような対応をしてくれるのか分かりづらく、ほとんどの性暴力被害者に利用されていない。そのため、性暴力に関するガイダンスを実施する際には、各相談機関がどのようなサービスが利用できるのかなどの、より分かりやすく具体的な情報を盛り込むべきである。また、相談機関側も積極的に情報を発信したり学生との距離を近づけることで、もし被害に遭った場合などに学生が相談しやすい環境をつくるべきである。

付録

Q1. あなたのメールアドレス（keio.jpまたはkeio.ac.jp）を記入してください。（keio.jp以外は回答としてカウントされませんのでお気をつけください。また記入した keio.jpは認証以外では使用しません。）

Q2. あなたの年齢を教えてください。（数字のみを記入）

Q3. あなたの所属を教えてください。

- 3.1. 文学部
- 3.2. 経済学部
- 3.3. 法学部
- 3.4. 商学部
- 3.5. 理工学部
- 3.6. 総合政策学部
- 3.7. 環境情報学部
- 3.8. 看護医療学部
- 3.9. 薬学部
- 3.10.医学部
- 3.11.通信教育課程
- 3.12.別科・日本語研修課程
- 3.13.文学研究科
- 3.14.経済学研究科
- 3.15.法学研究科
- 3.16.社会学研究科
- 3.17.商学研究科
- 3.18.医学研究科
- 3.19.理工学研究科
- 3.20.政策・メディア研究科
- 3.21.健康・マネジメント研究科
- 3.22.薬学研究科
- 3.23.経営管理研究科
- 3.24.システムデザイン・マネジメント研究科
- 3.25.メディアデザイン研究科
- 3.26.法務研究科（法科大学院）
- 3.27.教員
- 3.28.その他

Q4. あなたの学年を教えてください。

- 4.1. 学部 1 年
- 4.2. 学部 2 年
- 4.3. 学部 3 年
- 4.4. 学部 4 年
- 4.5. 修士 1 年
- 4.6. 修士 2 年
- 4.7. 博士 1 年
- 4.8. 博士 2 年
- 4.9. 博士 3 年
- 4.10.教員
- 4.11.その他

Q5. あなたのジェンダーアイデンティティを教えてください。

- 5.1. 女性

5.2. 男性
5.3. トランスジェンダー女性
5.4. トランスジェンダー男性
5.5. ノンバイナリー
5.6. ジェンダークィア
5.7. クエスチョニング
5.8. 答えたくない
5.9. その他（自由記述）

「現状、どのくらいの学生が性暴力の被害にあっているのか」を尋ねる質問です。

Q6. あなたは学生、または大学に雇用されている者、または大学に関係する者に、不快にさせられるような性的発言を受けたり、不快な性的なジョークや性に関する話をされたことがありますか？
6.1. はい
6.2. いいえ
6.3. 答えたくない

Q7. それは誰にされましたか？
7.1. 慶大生（同級生）
7.2. 慶大生（先輩）
7.3. 慶大生（後輩）
7.4. 慶大 OB・OG
7.5. 慶大教職員
7.6. 慶大事務職員
7.7. 答えたくない
7.8. そのような経験はない
7.9. その他（自由記述）

Q8. それはどこでされましたか？
8.1. 授業中
8.2. 部活動中
8.3. サークル活動中
8.4. 飲み会の場
8.5. 答えたくない
8.6. そのような経験はない
8.7. その他（自由記述）

Q9. あなたは学生、または大学に雇用されている者、または大学に関係する者から同意なく体を触られて嫌な思いをしたことはありますか？（選択肢は Q6 と同じ）

Q10. それは誰にされましたか？（選択肢は Q7 と同じ）

Q11. それはどこでされましたか？（選択肢は Q8 と同じ）

Q12. あなたは学生、または大学に雇用されている者、または大学に関係する者から同意のない性行為（キス、セックス、フェラチオ、膣への指挿入など）をされたことはありますか？（選択肢は Q6 と同じ）

Q13. それは誰にされましたか？（選択肢は Q7 と同じ）

Q14. それはどこでされましたか？（選択肢は Q8 と同じ）

Q15. あなたは学生、または大学に雇用されている者、または大学に関係する者に、オンライン上（SNS、オンライン授業、オンラインでのサークル活動、通話など）で、性的に不快にさせられたことがありますか？（選択肢は Q6 と同じ）

Q16. それは誰にされましたか？（選択肢は Q7 と同じ）

Q17.　それはどの媒体でされましたか？

17.1.SNS
17.2.オンライン会議ツール
17.3.メール
17.4.電話
17.5.そのような経験はない
17.6.その他（自由記述）

＊Q18 は欠番

Q19.　それはどのような状況でされましたか？

19.1.オンライン授業
19.2.オンライン部活
19.3.オンラインサークル
19.4.オンライン飲み会
19.5.個人間のやりとり
19.6.リプライ、コメントなど
19.7.そのような経験はない
19.8.その他（自由記述）

Q20.　上記の質問の経験がある場合、それはあなたの生活にどのような影響を及ぼしましたか？（複数選択可）

20.1.夜、眠れなくなった
20.2.心身に不調をきたした
20.3.自分に自信がなくなった
20.4.サークルや学生団体に行かなくなった、辞めた、変えた
20.5.大学にしばらく行かなくなった、辞めた、変えた
20.6.携帯の番号や SNS のアカウントを削除した、変えた
20.7.人付き合いがうまくいかなくなった
20.8.特に影響はなかった
20.9.そのような経験はない
20.10.　その他（自由記述）

Q21.　上記の質問の経験のとき、相手はお酒を飲んでいましたか？

21.1.はい
21.2.いいえ
21.3.わからない
21.4.そのような経験はない
21.5.その他

Q22.　学内で、「この人は性暴力やセクハラを受けているんじゃないか」と心配になるような言動を見たり聞いたりしたことがありますか？

22.1.はい
22.2.いいえ
22.3.答えたくない

「実際に相談をした人はどのくらいなのか、学内の相談場所は機能しているのか。」を尋ねる質問です。

Q23.　あなたは以下のサービスやリソースがセクハラ含む性暴力被害の相談を行なっていることを知っていますか？（該当するものをすべて選択してください）

23.1.学生相談室（三田・日吉・矢上・芝生田）
23.2.ストレス・マネジメント室（信濃町）
23.3.心身ウェルネスセンター（湘南藤沢）
23.4.ハラスメント防止委員会

23.5.法律相談（三田キャンパス 南校舎 地下一階）
23.6.保健管理センター（日吉・三田・湘南藤沢・矢上・信濃町）
23.7.上記のどれも知らなかった

Q24. 大学に在籍して以来、これまでの質問にあった経験について以下のいずれかに連絡、相談をしましたか？（該当するものをすべて選択してください）

24.1.学生相談室（三田・日吉・矢上・芝生田）
24.2.ストレス・マネジメント室（信濃町）
24.3.心身ウェルネスセンター（湘南藤沢）
24.4.ハラスメント防止委員会
24.5.法律相談（三田キャンパス 南校舎 地下一階）
24.6.保健管理センター（日吉・三田・湘南藤沢・矢上・信濃町）
24.7.していない（被害にあった）
24.8.していない（被害にあっていない）
24.9.答えたくない

Q25. 相談した場合：対応はどうしたか？（複数ある場合は、平均的な対応をお答えください。また、可能であれば詳細を最後の自由記述欄にてお答えください。）

25.1.大変満足した
25.2.まあまあ満足した
25.3.普通
25.4.あまり満足しなかった
25.5.全く満足しなかった

Q26. 相談しなかった場合：それは何故ですか？（該当するものをすべて選択してください）

26.1.どこに行けばいいのか、誰に言えばいいのかわからなかった。
26.2.恥ずかしい、精神的につらいと思った。
26.3.誰も信じてくれないと思っていた。
26.4.連絡するほど深刻だとは思っていなかった。
26.5.その人（加害者）がトラブルに巻き込まれることを望んでいなかった。
26.6.学問的、社会的、職業的にマイナスの結果を恐れていた。
26.7.秘密にされないかと心配していた。
26.8.自分で何とかできるものだった。
26.9.復讐されることが怖かった。
26.10. 学校のリソースが私に必要な助けを与えてくれるとは思わなかった。
26.11. 学校が休校中だった。
26.12. その他（自由記述）

Q27. あなたは大学での性暴力やその他の性的不正行為はどの程度問題視していますか？

27.1.かなり問題視している
27.2.まあまあ問題視している
27.3.それほどしていない
27.4.全くしていない
27.5.わからない

Q28. 誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的不正行為を報告した場合、キャンパスの職員が公正な調査を行う可能性はあると思いますか？

28.1.かなりある
28.2.まあまあある
28.3.あまりない
28.4.絶対にない
28.5.わからない

Q29. 誰かが大学の職員に性暴力やその他の性的な不正行為を報告した場合、キャンパスの職員がその報告を真剣に受け止める可能性はあると思いますか？（選択肢は Q28 と同じ）

Q30. 慶應義塾大学に入学してから、性暴力やその他の性的不正行為に関する研修モジュールや説明会を受講しましたか？

30.1.した
30.2.していない
30.3.わからない

Q31. これらの研修モジュールや説明会には、どのようなトピックが含まれていましたか？該当するものにすべて印をつけてください。

31.1.性暴力などの性的非行の定義について
31.2.性暴力の被害を防ぐ方法について
31.3.性暴力やその他の性的非行を防止する方法について
31.4.性暴力の加害者にならない方法について
31.5.性的同意について
31.6.性暴力を受けた際の相談先や対応について
31.7.受講していない
31.8.受講したが内容までは覚えていない
31.9.その他（自由記述）

「学生・教員は性暴力を性暴力と認識できているのか。」を尋ねる質問です。

Q32. あなたは以下の行為のうちどれを性暴力と認識していますか？

32.1.レイプ
32.2.セクハラ
32.3.同意のないキス
32.4.同意のないボディタッチ
32.5.のぞき
32.6.宿題を手伝わせる
32.7.無視する
32.8.ストーカー
32.9.盗撮
32.10. 悪口を言う
32.11. 避妊に協力しない
32.12. 罵倒や人格否定
32.13. ポルノを見せる
32.14. デート DV
32.15. 性的な言葉掛け

Q33. 学生が大学で性的暴行やその他の性的不正行為の事件を報告した場合にどうなるかについて、あなたはどの程度の知識を持っていますか？

33.1.かなり詳しい
33.2.まあまあ詳しい
33.3.ほとんど知らない
33.4.全く知らない

Q34. あなたは大学生活のオンライン化で性暴力が増えたと思いますか？

34.1.増えたと思う
34.2.変わらないと思う
34.3.減ったと思う

Q35. 自由記述欄（どのようなご意見でもかまいません。）

参考文献

＜論文＞

1. Association of American Universities（AAU）.（2019）. Combating sexual assault and misconduct.
2. Safe Campus Keio.（2020）. 2020 年度学内実態調査報告書 慶應義塾大学における 性暴力の実態調査結果報告書.

＜ウェブサイト＞

1. 慶應義塾大学 学生数 （2022 年 5 月現在）. https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/data/2022-university.pdf（2023 年 1 月 11 日最終閲覧）
2. 2022 年時点での AAU 加盟大学一覧：Association of American Universities. “Our Members”. https://www.aau.edu/who-we-are/our-members （2022 年 12 月 18 日最終閲覧）
3. 慶應義塾大学 教員数. https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/data/2022-1-faculty.pdf（2023 年 1 月 11 日最終閲覧）
4. SFC Course Syllabus. 心身ウェルネス https://syllabus.sfc.keio.ac.jp/courses/2022_27261?locale=ja（2023 年 1 月 11 日最終閲覧）